

関係各位

京都府病虫害防除所長
(公 印 省 略)

病虫害発生予察情報について

下記のとおり発表しましたので送付します。

病虫害発生予報第5号（7月）

予報の概要

作物名	病虫害名	予想発生量 〈平年比(前年比)〉	作物名	病虫害名	予想発生量 〈平年比(前年比)〉
イネ	葉いもち 紋枯病 セジロウンカ ツマグロヨコバイ 斑点米カメムシ類	並 (やや多) やや少 (やや少) <u>やや多</u> (やや少) 並 (並) <u>やや多</u> (並)	チャ	カンザワハダニ チャノキイロアザミウマ チャノミドリヒメヨコバイ クワシロカイガラムシ	山城: 並 (多) 丹波: やや少 (やや少) 丹後: <u>やや多</u> (並) 山城: <u>やや多</u> (やや多) 丹波: <u>やや多</u> (多) 丹後: <u>やや多</u> (多) 山城: 並 (やや少) 丹波: <u>やや多</u> (やや少) 丹後: <u>やや多</u> (やや多) 山城: やや少 (やや少) 丹波: <u>やや多</u> (やや多) 丹後: 並 (並)
ダイズ、アズキ	アブラムシ類とウイルス病	<u>多</u> (多)	果菜類	疫病・褐色腐敗病 うどんこ病 アブラムシ類とモザイク病 アザミウマ類 ハモグリバエ類	並 (並) <u>やや多</u> (やや多) <u>やや多</u> (多) <u>やや多</u> (多) 並 (並)
ナシ	黒斑病 黒星病 ハダニ類	やや少 (少) やや少 (やや多) <u>やや多</u> (多)	ウリ類	べと病 炭疽病	やや少 (やや少) 並 (並)
ブドウ	べと病	やや少 (並)	キュウリ	斑点細菌病	並 (並)
カキ	うどんこ病	少 (やや少)	ネギ	ネギアザミウマとネギえそ条斑病 ネギハモグリバエ	<u>やや多</u> (多) やや少 (やや少)
カンキツ	ハダニ類	<u>やや多</u> (多)	野菜全般	ハダニ類	<u>やや多</u> (並)
果樹全般	カメムシ類	並 (少)			
チャ	炭疽病 チャノコカクモンハマキ チャノホソガ	山城: 並 (やや多) 丹波: やや少 (やや少) 丹後: やや少 (少) 山城: <u>多</u> (やや多) 丹波: 並 (並) 丹後: <u>やや多</u> (やや多) 山城: 並 (並) 丹波: <u>やや多</u> (やや多) 丹後: <u>やや多</u> (やや多)			

※平年とは過去10年の平均である。

目次

予報の概要	1
予報本文	2
今後注意すべきその他の病虫害等	15
参考	
Ⅰ 近畿地方の気象1か月予報	18
Ⅱ 用語の定義	18
Ⅲ 予報本文の見方	19

農作物病虫害情報サービスホームページ
<https://www.pref.kyoto.jp/byogai/>



病虫害予察情報等メールサービス
<https://www.pref.kyoto.jp/bojoshou/mail-service/mailservice.html>



予報本文

イネ

1 葉いもち

予報内容 発生量：平年並（前年比やや多い）

予報の根拠

（１）山城、丹後地域の一部の本田で発生を認めている（平年比やや多い（＋））。

項目	本年	平年値
発生ほ場率(%)	7.1	3.0
発病株率(%)	0.3	0.5

（２）南丹地域の一部で、補植用苗に発生を確認している（＋）。

（３）長期持続型箱施用剤の普及率が高まっている（－）。

（４）向こう１か月の気温は平年比高く、降水量は平年比少なく、日照時間は平年比多いと予想されている（－）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）補植用苗が葉いもちの発生源となるので、放置したままの苗は早急に抜取り処分する。

（２）いもち病の発生は気象に大きく影響されるので、曇雨天が続く場合には注意する。

（３）ほ場の見回りを行い、肥料がムラ効きしているところを中心に、下葉に発病していないかどうか調べる。特に多肥田や山間、山沿いの水田では注意する。

2 紋枯病

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

（１）６月中旬現在、発生を認めていない。

（２）昨年８月の発生量は平年比少ない（－）。

項目	前年8月	平年値
発生ほ場率(%)	6.9	34.0
発病株率(%)	0.8	5.4

（３）向こう１か月の気温は平年比高く（＋）、降水量は平年比少なく、日照時間は平年比多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）分けつ期ごろに水際の葉鞘に発生し、その後水平、上位方向に進展する。

（２）早植栽培で発生が多く、気温３０℃前後で多湿条件が続くと多発する。

（３）出穂２０日前の発病株率が２０％以上であれば薬剤散布を行う。散布は発病部である葉鞘によく付着するように散布する。なお、穂いもちとの同時防除を考慮する。

（４）昨年多発したほ場では、深水管理をしない。

（５）窒素肥料の多用を避け、過繁茂にならないよう施肥管理に注意する。

3 セジロウンカ

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや少ない）

予報の根拠

（１）６月第３半旬現在、予察灯への誘殺を認めていない。

（２）６月中旬現在、本田見取り調査での発生を認めていない（平年並）。

（３）本田すくい取り調査では、山城地域で発生を認めた（平年比やや多い（＋））。

項目	本年	平年値
発生ほ場率(%)	3.6	4.0
虫数(頭)	0.03	0.08

※本田20回すくい取り調査。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 梅雨前線の活動が活発化すると多飛来することがあるので注意する。
- (2) 7月中旬以降、ほ場を見回り、株当たり10頭以上の発生を認めた場合は防除する。なお、幼虫は株元に生息しているので、薬剤が株元までかかるよう丁寧に散布する。

4 ツマグロヨコバイ

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、本田で発生を認めていない（平年並）。

項目	本年	平年値
発生ほ場率(%)	0.0	1.7
虫数(頭)	0.0	0.5

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 直接吸汁加害する他、萎縮病等を媒介する。

5 斑点米カメムシ類

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、斑点米カメムシ類は本田で発生を認めず（平年比やや少ない（－））、畦畔雑草での発生量は平年比やや多い（＋）。

	項目	本年	平年値
本田	発生ほ場率(%)	0.0	3.4
	虫数(頭)	0.0	0.1
畦畔	発生ほ場率(%)	57.1	38.4
	虫数(頭)	1.8	1.7

※20回すくい取り調査。

- (2) アカヒゲホソミドリカスミカメの予察灯（60W）への誘殺数は、京田辺で平年並、亀岡で平年比多く（＋）、京丹後で平年比やや多い（＋）。

場所	本年	平年値
京田辺市	2	1.5
亀岡市	47	9.7
京丹後市	20	9.1

※5月第4半旬～6月第3半旬までの合計誘殺虫数(頭)。

- (3) アカスジカスミカメの予察灯（60W）への誘殺数は、京田辺で平年並、亀岡で平年比やや多く（＋）、京丹後で平年比多い（＋）。

場所	本年	平年値
京田辺市	1	1.0
亀岡市	17	10.9
京丹後市	35	14.4

※5月第4半旬～6月第3半旬までの合計誘殺虫数(頭)。

- (4) 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている（＋）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 稲穂を吸汁加害し、斑点米の原因となるカメムシ類には多くの種類がいるが、特に、カスミカメムシ類による被害が増加している。
- (2) 水田周辺のイネ科雑草の穂を餌にして増殖し、本田へ侵入するので、草刈りを行い、イネ科雑草の出穂を防ぐ。
- (3) 草刈りは出穂2～3週間前と出穂直前の2回行うと効果的である。1回で済ませる場合は、出穂10日前までに行う。なお、草刈り時期が遅れると逆効果になるので注意する。
- (4) イネカメムシを除く斑点米カメムシ類については、穂揃期と傾穂期の防除（共同、一斉）が有効である。

- (5) これまでに山城地域と丹波地域の一部でミナミアオカメムシの発生を確認している。本種は、他の斑点米カメムシ類に比べて体が大きく吸汁量が多いため、少数でも被害が大きくなるので注意する。
- (6) 近年、イネカメムシの発生量が増加している。他の斑点米カメムシ類と異なり、出穂期に水稻の籾の基部を吸汁すると、不稔籾を生じさせ、穂揃い期以降に加害されると籾の基部が変色した斑点米を生じ、等級格下げの原因となる。他の主要な斑点米カメムシ類と異なり、穂揃い期以降ではなく出穂期に防除することが重要である。

※今後注意すべきその他の病害虫等は p 15 を参照

ダイズ、アズキ

1 アブラムシ類及びウイルス病

予報内容 発生量：平年比多い（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 6月第3半旬現在、アブラムシ類の黄色水盤での誘殺数は平年比多い（+）。

項目	本年	平年値
黄色水盤誘殺数(頭)	318.9	50.7

*誘殺数(頭)：5月第4半旬～6月第3半旬の合計値

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く（+）、降水量は平年比少なく（+）、日照時間は平年比多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) ほ場周辺のマメ科雑草を除去する。
- (2) ウイルス病はアブラムシ類が伝搬するので、発生初期の防除に留意する。
- (3) 種子塗布剤、粒剤の使用も有効である。

※今後注意すべきその他の病害虫等は p 15 を参照

果樹

1 ナシ 黒斑病

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比少ない）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、発生量は平年並。

項目	本年	平年値
発病葉率(%)	4.4	4.3
発生ほ場率(%)	100.0	71.0

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年比少なく（-）、日照時間は平年比多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 葉が繁茂する梅雨期は、本病感染の最盛期であり、降雨が続くと被害が多くなる。薬剤防除を徹底する。

2 ナシ 黒星病

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや多い）

予報の根拠

（１）６月中旬現在、発生量は平年並。

項目	本年	平年値
発病葉率（％）	1.5	4.4
発生ほ場率（％）	50.0	46.5

（２）向こう１か月の気温は平年比高く（－）、降水量は平年比少なく（－）、日照時間は平年比多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）降雨が続く、涼しい年に発生が多くなる。

3 ブドウ ペト病

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年並）

予報の根拠

（１）６月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。

項目	本年	平年値
発病葉率（％）	0.0	0.5
発生ほ場率（％）	0.0	13.3

（２）向こう１か月の気温は平年比高く（－）、降水量は平年比少なく（－）、日照時間は平年比多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）雨が多く、気温が低めに経過すると多発しやすい。
（２）ハウス栽培では、過繁茂を避け通風をよくする。

4 カキ うどんこ病

予報内容 発生量：平年比少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

（１）６月中旬現在、発生量は平年比少ない（－）。

項目	本年	平年値
発病葉率（％）	0.7	17.8
発生ほ場率（％）	33.3	93.3

（２）向こう１か月の気温は平年比高く（－）、降水量は平年比少なく、日照時間は平年比多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）夏季の高温時には病勢が治まるが、冷夏の年は分生子の飛散が続き、発病が続く。

5 ナシ、カンキツ ハダニ類

予報内容 発生量：ナシ 平年比やや多い（前年比多い）
カンキツ 平年比やや多い（前年比多い）

予報の根拠

（１）６月中旬現在、発生量はナシでは発生を認めず（平年並）、カンキツでは平年並。

作物	項目	本年	平年値
ナシ	寄生葉率(%)	0.0	0.8
	発生ほ場率(%)	0.0	15.1
カンキツ	寄生葉率(%)	1.7	8.1
	発生ほ場率(%)	33.3	56.7

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は平年比少なく(+)、日照時間は平年比多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 梅雨明け以降、急激に増加するので注意する。
- (2) 年間世代数が多く、薬剤抵抗性がつきやすいので、同一系統の薬剤を連用しない。
- (3) 合成ピレスロイド系薬剤を連用すると、多発する場合があるので注意する。

6 果樹全般 カメムシ類（チャバネアオカメムシ、クサギカメムシ等）

予報内容 発生量：平年並（前年比少ない）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、ナシでの被害は平年比やや多い(+).

項目	本年	平年値
被害果率(%)	0.3	0.3
被害ほ場率(%)	14.2	9.0

- (2) チャバネアオカメムシの予察灯（BL）での誘殺数は、京田辺市及び京丹後市で平年比やや少なく、亀岡市で平年比少ない(-).

場所	本年	平年値
京田辺市	0	24.1
亀岡市	0	11.5
京丹後市	5	45.8

※誘殺数：5月第4半旬～6月第3半旬の合計値

- (3) チャバネアオカメムシのフェロモントラップでの誘殺数は、京田辺市及び亀岡市で平年並、京丹後市で平年比やや多い(+).

場所	本年	平年値
京田辺市	2.0	11.5
亀岡市	27.9	64.4
京丹後市	13.7	6.3

※誘殺数：5月第4半旬～6月第3半旬の合計値

- (4) クサギカメムシの予察灯（BL）への誘殺数は、京田辺市、亀岡市及び京丹後市で平年並。

場所	本年	平年値
京田辺市	0	1.0
亀岡市	0	0.2
京丹後市	0	1.8

※誘殺数：5月第4半旬～6月第3半旬の合計値

- (5) ツヤアオカメムシの予察灯（ＢＬ）への誘殺数は、京田辺市、亀岡市及び京丹後市で平年並。

場所	本年	平年値
京田辺市	0	6.2
亀岡市	0	3.4
京丹後市	0	5.2

※誘殺数：5月第4半旬～6月第3半旬の合計値

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 園外から飛来し局地的に発生するので、特に山林などの隣接園では注意する。
 (2) ナシ、モモなどの無袋栽培やカキ、カンキツでは被害が多くなる。

チャ

1 炭疽病

予報内容	発生量：山城	平年並（前年比やや多い）
	丹波	平年比やや少ない（前年比やや少ない）
	丹後	平年比やや少ない（前年比少ない）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在の発生量は山城で平年比やや多く（＋）、丹波で平年並、丹後で発生を認めていない（平年並）。

地域	項目	本年	平年値
山城	発病葉数(㎡当たり)	11.4	3.1
	発生ほ場率(%)	57.9	47.1
丹波	発病葉数(㎡当たり)	10.7	7.8
	発生ほ場率(%)	83.3	70.0
丹後	発病葉数(㎡当たり)	0.0	1.5
	発生ほ場率(%)	0.0	33.3

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年比少なく（－）、日照時間は平年比多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 伝染源は、摘採されずに残った前茶期の病葉である。
 (2) 本病が感染するのは新葉に限られ、新芽生育期に降雨が続くと発生が多くなる。
 (3) 防除適期は、三番茶芽の第1～2葉開葉期である。

2 チャノコカクモンハマキ

予報内容	発生量：山城	平年比多い（前年比やや多い）
	丹波	平年並（前年並）
	丹後	平年比多い（前年比やや多い）
次世代幼虫ふ化期：		
	山城：	7月第3半旬～7月第4半旬（平年比遅い）
	丹波：	6月第6半旬～7月第2半旬（平年比やや遅い）
	丹後：	6月第6半旬～7月第2半旬（平年並）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、発生量は山城及び丹後で平年比多く（＋）、丹波で平年並。

地 域	項 目	本 年	平 年 値
山城	綴葉数(㎡当たり)	0.5	0.1
	幼虫・蛹数(㎡当たり)	0.7	0.0
	発生ほ場率(%)	21.1	5.8
丹波	綴葉数(㎡当たり)	1.0	8.3
	幼虫・蛹数(㎡当たり)	0.2	1.5
	発生ほ場率(%)	33.3	40.8
丹後	綴葉数(㎡当たり)	6.0	0.2
	幼虫・蛹数(㎡当たり)	1.3	0.1
	発生ほ場率(%)	100.0	15.8

(2) フェロモントラップへの誘殺数は宇治市及び綾部市で平年比やや少なく(－)、京丹後市では平年比多い(＋)。

場所	項目	本年	平年値
宇治市	誘殺数(頭)	85.3	176.0
綾部市		86.5	205.5
京丹後市		110	10.0

※誘殺数(頭)：5月第4半旬～6月第3半旬計

(3) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年比少なく(＋)、日照時間は平年比多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、本虫の宇治市での誘殺盛期は、5月上～中旬、6月中旬～7月上旬、7月下旬～8月中旬、9月中旬～10月上旬の4回世代を繰り返す。
- (2) ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。
- (3) ジアミド系及びIGR剤などの薬剤の効果が低下している地域があるので、これらの薬剤の効果が低いと感じられる場合は、同系統薬剤の連用を避ける。

詳細は、令和7年5月21日付け「防除所ニュース第3号」を参照。

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/news2025_03.pdf



3 チャノホソガ

予報内容

発生量：山城 平年並(前年並)

丹波 例年比やや多い(前年比やや多い)

丹後 例年比やや多い(前年比やや多い)

次世代幼虫ふ化期：

山城 7月第4半旬～7月第5半旬(平年並)

丹波 7月第4半旬～7月第5半旬(平年比やや遅い)

丹後 7月第3半旬～7月第4半旬(平年比やや早い)

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在の発生量は山城で平年並、丹波で例年並、丹後で例年比やや多い(＋)。

地 域	項 目	本 年	平 年（例年） 値
山城	寄生芽率（％）	0.8	3.0
	巻葉数（㎡当たり）	0.1	0.3
	発生ほ場率（％）	10.5	27.9
丹波	寄生芽率（％）	33.0	(34.6)
	巻葉数（㎡当たり）	0.2	1.7
	発生ほ場率（％）	66.7	55.0
丹後	寄生芽率（％）	34.7	(16.7)
	巻葉数（㎡当たり）	1.0	0.4
	発生ほ場率（％）	100.0	50.0

（２）フェロモントラップへの誘殺数は、宇治市で平年比少なく（－）、綾部市で例年並、京丹後市で平年並。

場 所	項 目	本 年	平 年（例年） 値
宇治市	誘殺数（頭）	585.7	1181.9
綾部市		1402.6	1650.4
京丹後市		1638.9	1347.3

※誘殺数（頭）：５月第４半旬～６月第３半旬計

（３）フェロモントラップへの誘殺盛期は宇治市で平年並、綾部市で例年比やや遅く、京丹後市で平年比やや早い。

（４）向こう１か月の気温は平年比高く、降水量は平年比少なく（＋）、日照時間は平年比多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）通常、５回世代を繰り返す。

（２）卵は３～７日でふ化し、新芽を加害する。

４ カンザワハダニ

予 報 内 容	発生量：山城	平年並（前年比多い）
	丹波	平年比やや少ない（前年比やや少ない）
	丹後	平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

（１）６月中旬現在の発生量は山城で平年比やや少なく（－）、丹波で発生を認めず（平年比少ない（－））、丹後で平年並。

地 域	項 目	本 年	平 年 値
山城	寄生葉率（％）	2.5	8.4
	寄生虫数(100葉当たり)	6.0	52.1
	発生ほ場率（％）	22.7	51.6
丹波	寄生葉率（％）	0.0	5.9
	寄生虫数(100葉当たり)	0.0	31.1
	発生ほ場率（％）	0.0	46.7
丹後	寄生葉率（％）	2.5	3.5
	寄生虫数(100葉当たり)	16.5	19.2
	発生ほ場率（％）	75.0	52.5

（２）向こう１か月の気温は平年比高く、降水量は平年比少なく（＋）、日照時間は平年比多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）繁殖力は１０～３０℃の範囲で高温の時ほど高いが、降雨により増殖が抑制される。

（２）通常、葉の裏側に生息するので、薬剤は葉裏にかかるよう丁寧に散布する。

(3) 園をよく見回り、発生の多い園では二番茶摘採後に防除を徹底する。

5 チャノキイロアザミウマ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い（前年比やや多い）
 丹波 例年比やや多い（前年比多い）
 丹後 例年比やや多い（前年比多い）

予報の根拠

(1) 6月中旬現在の発生量は、山城で平年並、丹波で例年比やや多く（＋）、丹後で例年並。

地 域	項 目	本 年	平年値
山城	寄生・被害芽率（％）	10.5	6.0
	発生ほ場率（％）	83.3	62.3
丹波	寄生・被害芽率（％）	30.0	(11.3)
	発生ほ場率（％）	50.0	(78.8)
丹後	寄生・被害芽率（％）	37.3	(29.5)
	発生ほ場率（％）	100.0	(92.9)

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年比少なく（＋）、日照時間は平年比多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 主に二番茶期以降に増加し、夏秋芽を吸汁加害する。
- (2) 多雨により発生は減少するが、生息密度が高いと多少の雨では影響が小さい。
- (3) 防除適期は、新芽伸育期である。
- (4) 発生の多い園では、三番茶芽の萌芽期と第1葉開葉期の2回散布の効果が高い。
- (5) ネオニコチノイド系、ピレスロイド系などの薬剤に対する効果が低下している地域があるので、同系統薬剤の連用を避ける。

6 チャノミドリヒメヨコバイ

予報内容 発生量：山城 平年並 （前年比やや少ない）
 丹波 例年比やや多い（前年比やや多い）
 丹後 例年比やや多い（前年比やや少ない）

予報の根拠

(1) 6月中旬現在の発生量は、山城で平年並、丹波及び丹後で例年比やや多い（＋）。

地 域	項 目	本 年	平年値
山城	寄生・被害芽率（％）	2.2	2.8
	発生ほ場率（％）	33.3	52.3
丹波	寄生・被害芽率（％）	16.5	(7.5)
	発生ほ場率（％）	100.0	(80.8)
丹後	寄生・被害芽率（％）	6.7	(1.6)
	発生ほ場率（％）	66.7	(63.1)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 二番茶期以降、発生が多くなる。
- (2) 防除適期は、新芽伸育期である。
- (3) ネオニコチノイド系、有機リン系などの薬剤に対する効果が低下している地域があるので、同系統薬剤の連用を避ける。

7 クワシロカイガラムシ

予報内容	発生量：山城	平年比やや少ない（前年比やや少ない）
	丹波	平年比やや多い（前年比やや多い）
	丹後	平年並（前年並）

予報の根拠

- （１）６月中旬現在の発生量は山城で平年比少なく（－）、丹波で平年比やや多く（＋）、丹後で平年比やや少ない（－）。

地 域	項 目	本 年	平年値
山城	寄生株率（％）	2.3	14.9
	発生ほ場率（％）	22.7	61.5
丹波	寄生株率（％）	58.3	32.2
	発生ほ場率（％）	100.0	71.7
丹後	寄生株率（％）	3.0	24.1
	発生ほ場率（％）	50.0	67.5

- （２）向こう１か月の気温は平年比高く、降水量は平年比少なく（＋）、日照時間は平年比多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）年間３回（一部山間部では２回）発生する。
（２）園を見回り発生が多い園では注意する。
（３）第１世代の発生が多かった園では特に注意し、幼虫ふ化期の防除に留意する。世代が進むほど幼虫ふ化時期がばらつき、ふ化期間が長くなるため、第２世代の防除は２回散布の効果が高い。
（４）クワシロカイガラムシの防除適期である幼虫ふ化期は気象条件により前後し、発生状況も変化する。

茶園ごとのクワシロカイガラムシの防除適期が予測可能な

「茶生育等予測マッピングシステム」が京都府で稼働中であるため活用する。

＊京都府内の茶園が対象。

使用料：無料

茶生育予測マッピングシステムの
概要は茶業研究所のHPへ



登録はこちら→



- （５）薬剤散布は株内部の枝に十分かかるように行う。

※今後注意すべきその他の病虫害等はp 16を参照

野菜

1 果菜類 疫病・褐色腐敗病

予報内容	発生量：平年並（前年並）
------	--------------

予報の根拠

- （１）６月中旬現在、ナスで褐色腐敗病の発生を認めていない（平年並）。
（２）向こう１か月の気温は平年比高く、降水量は平年比少なく、日照時間は平年比多いと予想されている（－）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）病原菌は水媒伝染するので、ほ場の排水に努める。特に、降雨時の地表水を速やかに排水する。
（２）マルチを張り、泥によるはね上げ伝染を防ぐ。また、溝に落ちて浸水したと思われる蔓は摘除して、ほ場外へ持ち出し処分する。

2 果菜類 うどんこ病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- （１）６月中旬現在、発生量はトマトで平年並、キュウリでやや多く（＋）、ナスで発生を認めていない（平年並）。
- （２）向こう１か月の気温は平年比高く、降水量は平年比少なく、日照時間は平年比多いと予想されている（＋）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）初発生時期が早いと多発し、被害が大きくなる。
- （２）施設栽培で発生しやすく、高温乾燥が続くと発生が多くなる。
- （３）トウガラシ類では、ハダニ類による被害と判別が難しいので、被害葉を十分に観察する。
- （４）菌糸が組織内で増殖するので、薬液が十分付着するよう丁寧に散布する。

3 ウリ類 べと病

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

- （１）６月中旬現在、キュウリで発生を認めていない（平年比少ない（－））。
- （２）６月中旬の病害虫調査協力員からの報告で、発生を認めている。
- （３）向こう１か月の気温は平年比高く、降水量は平年比少なく、日照時間は平年比多いと予想されている（－）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）気温２０～２５℃で、曇雨天が続くと発生しやすい。
- （２）肥切れしたり草勢が衰えると発生が多くなるので、肥培管理に注意する。

4 ウリ類 炭疽病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- （１）６月中旬現在、キュウリで発生を認めている（＋）。
- （２）向こう１か月の気温は平年比高く、降水量は平年比少なく、日照時間は平年比多いと予想されている（－）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）気温２２～２４℃で降雨が続くと伝染、まん延しやすい。発病後の防除は効果が劣るので、予防、早期防除に重点を置く。
- （２）種子伝染するほか、罹病株の残さ、資材等が伝染源となる。
- （３）窒素肥料の多用は発病を助長するので注意する。
- （４）夏秋作に発生しやすいので注意する。

5 キュウリ 斑点細菌病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- （１）６月中旬現在、キュウリで発生を認めていない（平年並）。
- （２）向こう１か月の気温は平年比高く、降水量は平年比少なく、日照時間は平年比多いと予想されている（－）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）降雨等により病原細菌が飛散し、葉及び果実の気孔や傷口等から侵入し発病する場合が多い。
- （２）曇雨天が続くと急速にまん延するので、気象の変化に注意する。
- （３）多湿が発病を助長するので、施設では換気を十分に行う。
- （４）発生してからでは防除が困難となるので、予防防除に努める。

6 野菜全般 ハダニ類（チャノホコリダニを含む）

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

- （1）6月中旬現在、発生量はキュウリで認めず（平年比少（－））、ナスで平年比やや多い（＋）。
- （2）向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年比少なく、日照時間は平年比多いと予想されている（＋）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）主に葉裏に生息し、乾燥条件で発生しやすい。
- （2）梅雨明け後急激に増殖するので、梅雨明け後の防除が大切である。
- （3）ハウス栽培では天候に関わらず発生しやすい。
- （4）ハウス内及びほ場周辺の除草を徹底する。

7 果菜類 アブラムシ類とモザイク病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比多い）

予報の根拠

- （1）6月中旬現在、アブラムシ類の発生量は、トマトで発生を認めず（平年並）、キュウリで平年並、ナスでは平年比やや少ない（－）。
- （2）6月中旬現在、キュウリでモザイク病の発生を認めていない（平年並）。
- （3）6月第3半旬現在、アブラムシ類の黄色水盤での誘殺数は平年比多い（＋）。
- （4）向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年比少なく、日照時間は平年比多いと予想されている（＋）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）アブラムシ類には直接吸汁加害するだけでなく、モザイク病を媒介するものもいる。
- （2）通常、無翅虫で集団加害するが、密度が高まると有翅虫が現れて分散・飛来し、発生が拡大する。
- （3）キュウリの急性萎凋症の発生の多いところでは、アブラムシ類の飛来に特に注意するとともに、ワクチン苗の利用も考慮する。

8 果菜類 アザミウマ類

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比多い）

予報の根拠

- （1）6月中旬現在、発生量はトマトの寄生花率では例年並で白ぶくれ症果率は平年比やや多く、キュウリでは平年比やや少なく（－）、ナスでは平年比やや多い（＋）。
- （2）向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年比少なく、日照時間は平年比多いと予想されている（＋）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）直接加害するだけでなく、ウイルス病を媒介するミカンキイロアザミウマやヒラズハナアザミウマ等の種類もいる。
- （2）ハウスや雨よけ栽培では高温乾燥が続くと、特に多発しやすいので注意する。
- （3）ハウス内及びほ場周辺の除草を徹底する。

9 果菜類 ハモグリバエ類

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- （1）6月中旬現在の発生量は、トマト及びキュウリでは平年並、ナスでは発生を認めていない（平年比やや少ない（－））。
- （2）向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年比少なく、日照時間は平年

比多いと予想されている（＋）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）苗からの持ち込みを防ぎ、罹病株の残さは土中に埋めて処分する。施設栽培では、開口部に 0.8 mm 目合いの防虫ネットを張る。
- （２）黄色粘着ロールをハウス周囲及び開口部に展張する。
- （３）発生を認めたら被害葉を取り除き、発生初期の防除に留意する。
- （４）施設マルチ栽培では、マルチ上に落ちた蛹を掃き集めて処分する。

10 ネギ ネギアザミウマとえそ条斑病

予報内容 発生量： 平年比やや多い（前年比多い）

予報の根拠

- （１）６月中旬現在、ネギアザミウマの発生量は小株で平年比やや多く（＋）、大株で例年並。
- （２）６月中旬現在、えそ条斑病の発生量は小株で例年並、大株で平年並。
- （３）向こう１か月の気温は平年比高く、降水量は平年比少なく、日照時間は平年比多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）ネギアザミウマは、年間１０世代以上くり返し、葉の表層を食害し、かすり状の食害痕を残す。ネギでは葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。
- （２）本種は、ネギえそ条斑病の原因となるアイリス黄斑ウイルス（Iris yellow spot virus：IYSV）を媒介する。
- （３）薬剤散布の他、赤色系防虫ネットや UV カットフィルムによる物理的防除が効果的である。
- （４）被害葉及び収穫残さが本虫の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- （５）殺虫剤散布後は効果を十分に確認し、感受性の低下が疑われる場合は系統の異なる薬剤をローテーション散布する。

詳細は下記の資料を参照。

技術資料「ネギアザミウマに対する薬剤殺虫効果（2021 年）」

<https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/negiazamiumakanjyusei2021.pdf>

技術資料「ネギえそ条斑病防除マニュアル」

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/negi_iysv-manual_20200124-forhp.pdf

技術資料「ネギ栽培における赤色系防虫ネット技術マニュアル」

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/negi_redcolor-net_manual.pdf

11 ネギ ネギハモグリバエ

予報内容 発生量： 平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

- （１）６月中旬現在の発生量は、小株で発生を認めず（平年比やや少（－））、大株でも発生を認めず（例年比やや少（－））。
- （２）向こう１か月の気温は平年比高く、降水量は平年比少なく、日照時間は平年比多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。
- （２）被害葉及び収穫残さが発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- （３）１葉あたり１～数匹の幼虫が加害するバイオタイプ A（従来系統）とは異なり、１０匹以上の幼虫で集中的に加害し、葉を白化させるバイオタイプ B（別系統）の発生を確認しているので注意する。

詳細は下記の資料を参照。

技術資料「ネギハモグリバエ防除マニュアル（2025 年）」 →



※今後注意すべきその他の病虫害等はp 16を参照

今後注意すべきその他の病虫害等

発生量等を予想していない病虫害について、発生生態及び注意すべき事項を掲載しています。

イネ

1 トビイロウンカ、コブノメイガ

6月第3半旬現在、トビイロウンカ及びコブノメイガの予察灯での誘殺を認めていない。いずれも海外飛来害虫であるため、活動が活発化すると多飛来することがあるので、予察情報に十分注意する。

2 白葉枯病

- (1) 暴風雨などが予想される時は深水にするなど、極力葉の損傷を少なくするよう努める。
- (2) 本病は穂ばらみ期から目立つようになり、7～9月頃に感染のピークを迎える。高温多湿の環境で多発する傾向があり、梅雨時の長雨や台風による暴風雨をきっかけに感染が一気に広がる恐れがあるので注意が必要である。

3 イチモンジセセリ（イネツトムシ）

6月中旬現在、丹後地域で発生を認めている。晩植田や窒素過多の田で発生が多くなる。防除時期は7月下旬～8月上旬の幼虫ふ化期である。

4 フタオビコヤガ（イネアオムシ）

- (1) 6月中旬現在、丹後地域で発生を認めている。山間・山沿い地域や集落周辺など、風通しの悪い水田で多発しやすく、曇雨天が多い年に発生しやすい。
- (2) 出穂前後に発生する世代の加害が多いと被害が出る場合がある。幼虫が4、5齢に成長すると摂食量が増加するため、被害が急激に拡大するので注意する。

5 イネクロカメムシ

- (1) 常発地では注意する。
- (2) 6月中旬から7月上旬が越冬成虫の水田への移動の最盛期であり、この時期の薬剤防除が最も有効である。ほ場をよく観察し、3株に1頭以上の発生（幼虫を含む）を認めたら防除を実施する。

ダイズ、アズキ

1 ハスモンヨトウ

- (1) 卵塊は綿毛状のもので覆われ、ふ化した幼虫は若齢期を集団で過ごし、葉の表皮を残して裏側を食害する。食害された葉は白く透け見えることから「白変葉」と呼ばれ、発生初期の目安となる。
- (2) 齢が進んだ幼虫は周囲に分散し、かつ、薬剤の効果が著しく低下する。

2 白絹病

- (1) 本病は酸性土壌で発生しやすいため、作付前に石灰を施用して土壌酸度を矯正する。
- (2) 未熟な有機物の施用は、本病の発生を助長する。生ワラや緑肥作物等をすき込んだ場合は、十分に腐熟してから播種または移植を行う。
- (3) 土壌中に残存した菌核が第一次伝染源となるので、連作を避ける。

(4) 菌核は3～4か月湛水すると死滅するので、水稻を含む輪作が有効である。

チャ

1 ツマグロアオカスミカメ

薬剤散布は萌芽期及び一葉期に行う。多発園では2回防除を行う。

2 チャトゲコナジラミ

本種の農薬による防除適期は若齢幼虫期である。成虫発生期の散布では密度抑制効果が不十分であるため、成虫の飛翔が落ちついた頃を見計らって薬剤散布を行う。

野菜

1 キュウリ褐斑病

発生すると被害が大きいため、夏秋栽培では注意し、下葉の摘葉、摘心等の予防に努める。

2 キュウリ退緑黄化病、キュウリ黄化病、キュウリ黄化えそ病、CABYV

いずれもウイルスによる病害で、退緑黄化病及び黄化病では葉に退緑及び黄化症状を示して減収し、黄化えそ病では葉にモザイク、えそ斑点及び黄化等の症状を、果実にモザイク斑紋や奇形を生じて減収し、CABYV（和名未定）では中位葉の半分程度に退緑及び黄化症状が発生して減収する。いずれもキュウリ以外のウリ科作物でも発生する。媒介は、退緑黄化病ではタバココナジラミにより、黄化病ではオンシツコナジラミにより、黄化えそ病ではミナミキイロアザミウマによる。CABYVの媒介虫は不明であるが、海外ではアブラムシ類とされている。

詳細は下記の特殊報を参照。

キュウリ退緑黄化病：令和5年12月26日付け「発生予察特殊報第2号」。

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tokusyu2023_02.pdf

キュウリ黄化病：令和6年4月24日付け「発生予察特殊報第2号」。

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tokusyu2024_02.pdf

キュウリ黄化えそ病：令和6年9月4日付け「発生予察特殊報第4号」。

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tokusyu2024_04.pdf

CABYV：令和6年2月1日付け「発生予察特殊報第1号」。

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tokusyu2024_01.pdf

3 サツマイモ基腐病

最近府内で確認された病害で、本ぽでは地際部が黒くなり、塊根はなり首から腐敗し、降雨等により周辺の株に広がっていく。本病の発生を確認したら、罹病株の抜き取りと、薬剤防除が必要である。

詳細は令和6年5月24日付け「発生予察特殊報第3号」を参照。

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tokusyu2024_03.pdf

4 トマト黄化葉巻病及びトマト黄化病

トマト黄化葉巻病は、黄化葉巻ウイルス（TYLCV: Tomato Yellow Leaf Curl Virus）の感染により引き起こされる病気で、症状は、先端部の葉が内側に巻く、葉縁が黄化、株の萎縮等で、タバココナジラミによって媒介される。

トマト黄化病はトマト退緑ウイルス（ToCV: Tomato chlorosis virus）の感染により引き起こされる病気で、症状は葉の一部の葉脈間が退緑及び黄化し、生理障害の苦土（マグネシウム）欠乏の症状に類似し、タバココナジラミ及びオンシツコナジラミによって媒介される。

詳細は令和3年8月6日付け「発生予察特殊報第1号」を参照。

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tokusyu2021_01.pdf

5 タバココナジラミ

タバココナジラミは世界中に分布し、多くのバイオタイプが存在する。中でも

バイオタイプQは薬剤感受性が低く難防除害虫であるので、防虫ネットや黄色粘着板及び農薬等を組み合わせた「総合的害虫管理」が有効となる。

詳細は、

技術資料「施設トマトにおけるタバココナジラミ
防除マニュアル（2025年）」

→



6 タバコガ類

幼虫が果実に食入すると薬剤がかかりにくくなるので、早期発見に努め、食入前及び若齢期の防除に努める。

7 トマトキバガ

本年6月に府北部の施設トマトで被害を確認している。本虫はトマトの葉だけでなく果実も食害するため、被害は大きくなる。早期発見に努め、発生を確認したら薬剤防除を行い、剪定残渣等は適切に処分する。

詳細は令和7年6月13日付け「防除所ニュース第4号」を参照。

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/news2025_04.pdf

8 ハスモンヨトウ

「ダイズ、アズキ」の項を参照のこと

参 考

I 近畿地方 1 か月予報（6 月 2 1 日から 7 月 2 0 日までの天候見通し）

令和 7 年 6 月 1 9 日
大阪管区气象台発表

＜予想される向こう 1 か月の天候＞

暖かい空気に覆われやすいため、向こう 1 か月の気温は高いでしょう。期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。

太平洋高気圧に覆われやすいため、向こう 1 か月の降水量は少なく、日照時間は多いでしょう。

＜向こう 1 か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（％）＞

	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気 温	1 0	1 0	8 0
降 水 量	5 0	3 0	2 0
日 照 時 間	2 0	3 0	5 0

病虫害防除所では上記の天候の 1 か月予報の表現を「向こう 1 か月の気温は平年比高く、降水量は平年比少なく、日照時間は平年比多いと予想されている。」としました。

II 用語の定義

1 半旬のとり方

第 1 半旬 第 2 半旬 第 3 半旬 第 4 半旬 第 5 半旬 第 6 半旬
各月の 1 ～ 5 日 6 ～ 10 日 11 ～ 15 日 16 ～ 20 日 21 ～ 25 日 26 ～ 最終日

2 発生量 ―― 病虫害の発生程度と広がり両面を加味したものをいう。

3 平年値 ―― 原則として過去 10 か年の平均とする。 データが 10 年に満たない場合（5 ～ 9 年）は例年値とする。

4 平年値との比較

1) 時期

平年並	平年値を中心として前後 2 日以内
やや早い	平年値より 3 ～ 5 日早い
やや遅い	平年値より 3 ～ 5 日遅い
早い	平年値より 6 日以上早い
遅い	平年値より 6 日以上遅い

2) 量（発生量、発生面積等）

平年並	平年値並の発生で 10 年間に 4 回は発生する程度の普通の量
やや多い	「平年並」より発生が多く、10 年間に 2 回程度の頻度で発生する量
やや少ない	「平年並」より発生が少なく、10 年間に 2 回程度の頻度で発生する量
多い	「やや多い」より多く、10 年間に 1 回程度しか発生しない量
少ない	「やや少ない」より少なく、10 年間に 1 回程度しか発生しない量

Ⅲ 予報本文の見方

1 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い（前年比やや多い）
丹波 平年並（前年並）
丹後 例年並（前年並）

- ・「予報内容」は、今後の病害虫発生状況や発生時期の予測を平年比で示しています。
- ・平年比の見方は、「Ⅱ 用語の定義、4 平年値との比較」を参照してください。
- ・（ ）内の前年比は予想月の前年の発生量（時期）との比較です。
- ・必要に応じて地域別に示します。

予報の根拠

- （１）前年１０月の発生量は、山城、丹波、丹後で平年並の発生。
（２）４月中旬現在、山城で平年比多く（＋）、丹波、丹後で発生を認めていない（平年（例年）並）。

地域	項目	４月の調査結果	４月 平年値
山城	綴葉数(/㎡)	3.0	0.1
	幼虫数(/㎡)	0.5	0.0
	発生ほ場率(%)	22.7	3.7
丹波	綴葉数(/㎡)	0.0	0.5
	幼虫数(/㎡)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	11.7
丹後	綴葉数(/㎡)	0.0	0.0
	幼虫数(/㎡)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	0.0

- ・「予報の根拠」とした直近の巡回調査のデータの中で主だったものを示しています。平年値も記載しているので、防除等の目安としてください。

- （３）４月中旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は、宇治で平年比少ない（－）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）幼虫で越冬し、春に羽化した成虫が発生源となるので、前年秋に多発した園では注意する。
（２）通常、第１回目のふ化期は５月末～６月始めで、４回世代を繰り返す。
（３）ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

- ・「予報の根拠」は、巡回調査の結果、天候、フェロモントラップや予察灯への誘殺状況、指導機関からの情報等、「予報内容」で示した発生量や発生時期の予測の根拠となった事項を記載しています。
- ・文中の（－）、（＋）は、予測される発生量に影響を及ぼすと考えられるもので、（－）の場合発生が少なくなると考えられる要因、（＋）は発生量が多くなると考えられる要因を示しています。

- ・「発生生態及び防除上注意すべき事項」は、当該病害虫の生態、薬剤防除や耕種的防除方法の留意事項、要防除水準等を示しています。

※病虫害防除については、病虫害防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農協にご相談ください。

詳しい農薬情報は、農林水産省ホームページの「農薬コーナー」の「農薬情報」をご覧ください。

ホームページアドレス http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/index.html

農業改良普及センター 電話番号一覧		
・京都乙訓	農業改良普及センター	0 7 5 - 3 1 5 - 2 9 0 6
・山城北	農業改良普及センター	0 7 7 4 - 6 2 - 8 6 8 6
・山城南	農業改良普及センター	0 7 7 4 - 7 2 - 0 2 3 7
・南丹	農業改良普及センター	0 7 7 1 - 6 2 - 0 6 6 5
・中丹東	農業改良普及センター	0 7 7 3 - 4 2 - 2 2 5 5
・中丹西	農業改良普及センター	0 7 7 3 - 2 2 - 4 9 0 1
・丹後	農業改良普及センター	0 7 7 2 - 6 2 - 4 3 0 8

京都府病虫害防除所

〒621-0806 京都府亀岡市余部町和久成9

TEL 0771-23-9512

FAX 0771-23-6539

ー農薬の使用にあたっては使用基準を遵守することー